

---

# 16 世紀のノガイ＝オルダ (2)

## カラサイ、カジとアディルに焦点をあてて

坂井弘紀

### ——要旨

15-17 世紀、キプチャク草原の遊牧政権ノガイ＝オルダの歴史は、中央ユーラシアのテュルク系諸民族のあいだに英雄叙事詩などの口頭伝承で伝えられてきた。ノガイ＝オルダの代々の有力者について伝える一連の伝承は「ノガイ大系」としてまとめられる。16 世紀後半のノガイの有力者であるカラサイやカジについて歌った叙事詩もまた、「ノガイ大系」に整理される。彼らを描いた英雄叙事詩は、ノガイ＝オルダが大ノガイと小ノガイとに分裂する過程やその後のノガイの状況を歌っている。本稿では、ノガイの有力者オラクとママイの時代を取り上げた先稿に引き続き、16 世紀のノガイ＝オルダ、とくに小ノガイについて、オラクの息子カラサイとカジに注目して論じる。またクリミア＝ハン国の王子アディルを主人公とする叙事詩も取り上げながら、クリミア＝ハン国、オスマン帝国、ロシア、サファヴィー朝（ペルシア）など周辺諸国とノガイとの関係についても論じる。

### はじめに

筆者は本紀要 12 号において、キプチャク草原の騎馬遊牧政権ノガイ＝オルダの 16 世紀の状況について、ノガイ＝オルダの二人の有力者オラクとママイを軸に論じてきたが、<sup>(1)</sup>本稿ではそれに引き続き、16 世紀後半のノガイ＝オルダとその周辺地域について、多くの英雄叙事詩に描かれる歴史上の人物、カラサイとカジ、<sup>(2)</sup>アディルを中心に論じたい。ノガイ＝オルダの有力者で、オラクの息子であるカラサイとカジやクリミア＝ハン国のハン息子アディルについての口碑は、中央ユーラシア各地のテュルク系諸民族の間に語り伝えられている。先稿でも述べたように、これらの口碑は、文字で記された史料に乏しい、この地域の歴史を知る上で、きわめて貴重な史料でもある。この地域の人々の歴史観が映された英雄叙事詩をはじめ、種々の同時代史料をもとにして、16 世紀後半のキプチャク草原の状況を見ていきたい。

なお、本稿で扱う主な英雄叙事詩は、『カラサイとカジ』、『アディル＝スルタン』である。これらの叙事詩は、現在で言うところのカザフ・バシュコルト・ノガイ・カラカルパク・クリミア＝タタール・ドブルジャ＝タタール（ルーマニア）の各民族に伝えられてきた。

これらの民族には「ノガイ大系」と呼ばれる一連の叙事詩が語り継がれてきたが、『カラサイとカジ』も『アディル＝スルタン』も彼らの文化的なつながりを強く感じさせる代表的作品であるといえよう。叙事詩の引用については、引用部分の末尾にテキストを略字で示した。テキストの出典は本稿末の一覧を参照いただきたい。

## 1. 16世紀後半のノガイ＝オルダ

16世紀後半は中央ユーラシアの歴史において大きな転換期であった。1552年のロシアのカザン＝ハン国征服を皮切りに、中央ユーラシアのテュルク・イスラーム系諸国は、アストラハン＝ハン国（1556年）、シベリア＝ハン国（1582年）とロシアに次々と征服されていった。つまり、この時代はロシアの対外的拡張が始まった時期であり、中央ユーラシアの勢力図が大きく変わりゆく転機でもあった。こうした状況を背景に、ノガイ＝オルダにもロシアと近い勢力が現れた。イスマイルを筆頭とするグループである。先稿で見たように、16世紀前半のノガイ＝オルダは、ムサの息子たち、とりわけイスマイルとユスフとの対立により完全な分裂状態に入り、互いに争うようになっていた。ユスフがイスマイルに殺され、イスマイルが政権において優勢となると、彼の台頭を快く思わない人々の反攻も盛んになる。イスマイルの兄弟ママイとムサの孫オラクがイスマイルと敵対し、その結果、オラクはイスマイルに暗殺されたと叙事詩は伝える。そして、オラクとママイ亡き後、反イスマイル勢力を率いた人物こそ、オラクの息子カジとカラサイにほかならない。一般にイスマイルの勢力は大ノガイ、カジ率いる勢力は小ノガイと呼ばれるが、本稿でもそれにならうこととしよう。この二つの勢力の分裂・形成は、先行研究では1550年代であるとされる。<sup>(6)</sup>大ノガイは、中央ユーラシアの草原に台頭し、次第に帝国に発展しつつあるロシアとの関係を維持し、小ノガイは、1783年にロシアに征服されるまで存在感を示したクリミア＝ハン国<sup>(7)</sup>との関係を重視した。二つは互いに異なる方角を見ていたのだった。

## 2. ノガイの有力者カラサイとカジ兄弟

### (1) カラサイとカジの人物像

16世紀後半のノガイ＝オルダについて伝える叙事詩では、カラサイとカジは、先稿で取り上げたオラクとママイのように、ほとんど常にペアで登場する。<sup>(8)</sup>オラクとママイが、兄弟とする説もあるものの、二人が本当の兄弟ではなかったのに対し、カラサイとカジは実の兄弟であった。ここではまず、小ノガイの有力者であったカラサイとカジの生い立ちについて見てみよう。

「真の勇士、賢明で力強い」（KA8:116）とされるカラサイとカジは、ノガイ＝オルダの有力者であったオラクの息子たちである。オラクは、ノガイ＝オルダの統治者であったムサの孫であり、すなわちノガイ＝オルダの創始者エディゲ<sup>(9)</sup>の血を引く人物であった。彼は

イスマイルの罠により悲劇的な最期を遂げたと伝えられ、その出来事はノガイ＝オルダ分裂のきっかけの象徴として描かれる<sup>(10)</sup>。叙事詩は、オラクが死んだとき、カラサイは 17 歳、カジは 15 歳であったと伝える (KA2:19,31)。先稿で指摘したように、オラクが 1540 年までに死んだのであれば、カラサイは 1523 年、カジは 1525 年より以前の生まれとなり、また研究者ジルムンスキーの指摘の通り、オラクが 1548 年に死んだとすると、カラサイは 1531 年、カジは 1533 年生まれということになる。

叙事詩に伝えられるように、父オラクが死ぬと、カラサイとカジはママイを父のように慕い、彼の片腕となった<sup>(11)</sup>。父オラクを殺したと伝えられるイスマイルは 1550 年代に勢力を伸ばし、1555 年にノガイ＝オルダのビーであったユスフを暗殺すると、実質的なノガイの統治者となった<sup>(12)</sup>。先に述べたように、分裂したノガイ＝オルダのうち、イスマイル派ともっとも激しく対立した人物がカジであった<sup>(13)</sup>。叙事詩は「父ムサが残したすべての財産と玉座は自分のものであるべきだと考えたイスマイルは、兄弟の間に欺瞞と憎悪の炎を炊きつけ、それぞれを追放してしまったので、『狡猾なイスマイル Änji Ysmaiyl』と呼ばれた」(KA14:121) と、イスマイルの狡猾さを強調する<sup>(14)</sup><sup>(15)</sup>。

カジは、イスマイルによるユスフ暗殺後、直ちにイスマイルを攻めるなど、ユスフの息子たちとともに積極的な軍事行動に出ている。年代記によれば、カジは 1555 年 4 月に、ユスフの息子たちとユヌス＝ムルザ、アリ＝ムルザとともにアストラハンを攻撃し、また 6 月にはユスフの息子たちとともにイスマイルのオルダ（宮帳）を攻撃し、イスマイルを追いつつ<sup>(16)</sup>。イスマイルに対する憎悪を叙事詩は「カラサイは『いまアンジ（イスマイル）を殺さずに、下馬することはない！』といて、駆けていった (KA14:210)」と伝える<sup>(17)</sup>。

## (2) 大ノガイのイスマイルと小ノガイのカジ

イスマイルによる圧迫や彼のロシアとの友好政策に耐えられなくなった多くのノガイの部族はカジの下に結集し、氷結したヴォルガ川の西岸に渡った。彼らは、クリミア＝ハン<sup>(18)</sup>であるデヴレト＝ギレイの庇護を受け、彼からカバルダとアゾフの間に牧草地を与えられた<sup>(19)</sup>。つまり、カジ率いるノガイの集団は、イスマイル率いる大ノガイやロシアとの対立を背景に、ヴォルガ川を越えて、クリミア＝ハン国の庇護下に入ったのである。イスマイルが 1557 年 10 月にロシア皇帝に送った書簡には、「カジ＝ミルザがクリミアの王と同盟を結んだ」、「我々がカジ＝ミルザと戦うことを望んだので、カジ＝ミルザは我々の元から

チェルケスに逃げ去った<sup>(20)</sup>」とある。このことからカジが北カフカースのチェルケス地方に移動したのは1557年ころと推定される<sup>(21)</sup>。その直接的なきっかけは、イスマイルが統治者ユスフを謀反で殺害し、政権を奪取したことであろう。カバルダ・アゾフ間の彼らの新天地は、小ノガイ、あるいはカジの名にちなんで「カジ＝ノガイ」や「カジ＝ウルス」と呼ばれた。小ノガイの領域について詳細に見てみると、それはヴォルガ川下流域からテレク川、ドン川下流域とアゾフ海沿岸、黒海沿岸とクバン川に囲まれ、西部はクリミア＝ハン国と接するものであった<sup>(22)</sup>。

北カフカース地方は15世紀後半から、オスマン帝国の支配下に入ったと考えられる。オスマン帝国やクリミア＝ハン国の命令に従い、北カフカースの人々は、1578-83年にシルヴァンやカラバグ攻撃に加わった<sup>(23)</sup>。北カフカース、カバルダの諸侯たちは次第に小ノガイと帯同し、この時期に小ノガイの住民は何倍にも増えた。1560年代の初めまでに、小ノガイは大ノガイから分離した少人数の社会から強力な攻撃的な勢力へと変化したのである。カジは、クリミアのハン、デヴレト＝ギレイ＝ハンと友好的な関係を維持する一方、大ノガイとは敵対し、イスマイルと戦うミルザたちを庇護した。こうして、ノガイ＝オルダの内訌は一層激しくなったのであった。

イスマイルは1563年に死去した<sup>(24)</sup>。その詳細は明らかではないが、イスマイルの最期について、叙事詩は次のように伝える。「アンジ（イスマイル）は頭をスカーフで覆い、伸び切ったシャツを身につけ、手には棒をもち、キビを炒っていた。カラサイがやってきたのを知って、『ここからどうやって逃げようか』とカラサイを見つつ、怖気づきながら辺りを見まわしていると、足を草にひっかけてしまい、躓いて転んだ。一本の草が体内に入っ、アンジは死んでしまった。すぐにカラサイがそこに来ると、アンジがうつぶせで倒

れていた。(カラサイは)『こいつは嘘つきだ。たくさんの陰謀を企てた!』と思い、殺してしまおうと近づいたが、とっくに死んでいた(KA14:210)」。また、イスマイルの死因については次のように説明される。「アンジの死後、民が集まってきた。民は『このアンジの父はムサという聖人だ。父が分け与えた遺産にアンジは満足しなかったのだ。ムサは『わしの望みを受け入れぬものは何らかの理由で大地に入るであろう。胸に草が刺さって死ぬであろう!』』と言っていた。この二つの言葉が実現してしまったらしいな』と言った。アンジはそのような人間であったものの、手厚く埋葬された」(KA14:210)。前稿でも確認したように、口頭伝承では、イスマイルは卑怯で悪辣な人物であったとネガティブに伝えられ、その死因はそうした性格による自業自得であったとされている。

イスマイルの死後、ビーの位を継いだ彼の息子ディンアフメド<sup>(26)</sup>(統治期間 1563-1578)は、モスクワに盲従することはなかったようだが<sup>(27)</sup>、大ノガイの名士たちはモスクワに向かい、敬意をもって受け入れられた。ディンアフメドの死後は、ディンアフメドの弟ウルスがビーの位に就いた(統治期間 1578-1590 年)。ウルスの孫ヤندانやカシムは、イスラームからロシア正教に改宗し、それぞれボリス、アンドレイとロシア風に改名し、ロシアに接近した。<sup>(28)</sup>1615 年にカザンで改宗したアンドレイ(カシム)は、モスクワ近郊に領地を冊封されるとともに、モスクワに邸宅を与えられ、彼の子孫は、ロシアの名門貴族ウルソフ家としてロシアにおいて高く登用された。<sup>(29)</sup>ウルソフとはもちろん先祖の名ウルスに由来する。ウルスのあとをディンアフメドの息子オルマンベト<sup>(30)</sup>が継ぐなど、大ノガイはイスマイルの子孫が代々治めた。

一方、カジ=ノガイともいわれる小ノガイを創設したカジは 1576 年に死去した。<sup>(31)</sup>1576 年のノガイからロシアへの書簡には、「カジはアゾフの人々とチェルケスに赴き、そこで死んだという、我々への情報は正真正銘で、しかも複数の情報である」とある。<sup>(32)</sup>このほか、1577 年春のカバルダへの行軍でカジは死去したとの説もある。<sup>(33)</sup>先に見たように、カジが 1525 年以前から 1533 年の間に生まれたとすれば、彼が死去したのは 40 代半ばから 50 代のことであったと考えられる。カジがまだ生きている間、大ノガイと小ノガイの指導者は互いに不倶戴天の敵同士であったが、カジが死んでからは、両者の間に雪解けの気運も生まれ、イヴァン 4 世は、北西カフカースのカジの兄弟やユスフ一族とも関係をもつようになった。<sup>(34)</sup>しかし、小ノガイはクリミア=ハン国とのつながりをさらに強化していく。クリミア=ハン国のデヴレト=ギレイはカジの死を惜しみ、カジの兵士をクリミア軍の親衛隊に編成し、小ノガイの有力者たちは北カフカースの軍事衝突にしばしば関与した。カジの死後、小ノガイはムサ裔のヤクシサートに率いられた。<sup>(35)</sup>ヤクシサートは 1590 年ころ死去し、その息子のハンが小ノガイを治めた。カジの死によって、小ノガイが崩壊したり弱体化したりすることはなく、かえって大ノガイからの移住者が増えたという。その中には、敵対していたイスマイルの息子ディンバイやクトウルバイ<sup>(36)</sup>さえもいた。イスマイルの曾孫バラン=ガジが、小ノガイに加わり、ビーになったこともあった。<sup>(37)</sup>



### 3. 小ノガイとクリミア＝ハン国

小ノガイとクリミア＝ハン国との関係を知る上で、カラサイやカジ、また彼らと同時代のクリミア＝ハン国の有力な人物であったアディル＝ギレイについて歌った叙事詩は格好の材料となる。アディルとカラサイ・カジ兄弟との関係は、当時のクリミア＝ハン国と小ノガイとの関係を如実に象徴しているからである。それらは、敵クズルバシュに捕らわれたクリミア＝ハン国の王子アディル＝スルタンをカラサイやカジが救出に向かうことを伝えながら、両者の緊密な関係を示している。この章では、叙事詩の情報を中心に、小ノガイとクリミア＝ハン国との関係を探ってみたい。

#### (1) 叙事詩『アディル＝スルタン』

この時代の状況を伝える叙事詩には、クリミア＝ハン国のアディル＝ギレイを主人公としたものもある。そのようなアディルの伝承にも、小ノガイの戦士たちが登場する。まずここで、より史実を反映していると考えられる、ノガイの英雄叙事詩『アディル＝スルタン』のあらすじを紹介しておこう。なお、ここでいうノガイとは現在北カフカースに住むロシア連邦における少数民族のノガイ人のことである。

「クリミア＝ハン国の若い王子アディルは幼少から優れた勇士であった。アディルが20歳の時、オスマン帝国 Kongkerdey ulli Turk の皇帝 patsha から使いの者がやってきて、彼に勅令を届けた。学を修めたアブルガズなる者がアディルに、クズルバシュへの攻撃の準備をするように進言した。ウイスン族のスレイマン、オラクの息子カラサイをそれぞれ隊長にするように、また行軍のための食料や水を用意するように忠言したのである。アディルとともに軍隊は、クズルバシュの国境まで来た。アディルの軍勢はクズルバシュの町を進攻し、敵に勝利した。戦いに疲れたアディルは、一人で休息を取った。するとそこへクズルバシュたちが現れ、彼を捕らえ殺害してしまう。そのころ、アディルの母は夢を見て、それを占い師に解いてもらっていた。占い師は、その夢をアディルの勝利とその喜びと解釈して、彼女に伝えた。しかし、アディルの母が帰ると、正しい解釈を行った。それは、アディルがクズルバシュに敗れ、尺骨から腕を斬られ、膝から脚を斬られ、両目をくり抜かれ、殺されたことを意味するものであった。やがて、アディルの死の知らせが届く。人々は馬を屠って、彼の死を悼んだのであった」(NO1)。

#### (2) 敵「クズルバシュ」とは？

クリミア＝ハン国と小ノガイが戦ったと伝えられるクズルバシュとはいかなる敵であろうか。まず、敵のクズルバシュについて押さえておこう。クズルバシュとは「赤い頭」の意味で、ここでは当時イランを支配していたサファヴィー朝を支えたテュルク騎馬軍団を指す。サファヴィー朝は1501年、現在のイランに興った王朝で、シーア派を信奉するサ

ファヴィー教団を母体とし、その信者はテュルク系遊牧民が主体であった。彼らは、赤い帽子をかぶっていたことから「赤い頭」と呼ばれた。このころ、クズルバシュは「まったくの戦闘マシンと化し<sup>(39)</sup>」たほど、その戦闘能力の高さが知られていた。口碑にクズルバシュとの戦いがよく伝えられるのは、強力な敵と苦戦したことを後世に伝えようとしたためかもしれない。サファヴィー朝はオスマン帝国と激しく対立し、とくにタフマースブ（在位 1524-76 年）の治世には、オスマン帝国と泥沼の戦いが繰り広げられた。オスマン帝国の「最盛期」を築いた大帝スレイマン 1 世は、ヨーロッパにおいては、モハーチの戦いやプレヴェザの海戦で勝利し、またウィーン包囲を行うなどしたが、東方においては、バグダードに遠征するなど、サファヴィー朝と覇権を激しく争ったのであった。当時すでにオスマン帝国を宗主国としていたクリミア＝ハン国も、サファヴィー朝と敵対関係にあった。1578 年と 79 年の 2 回、クリミアの軍勢はサファヴィー朝を攻めたが、手痛い敗北を被った<sup>(40)</sup>。叙事詩は、サファヴィー朝と戦うクリミア＝ハン国にノガイ（小ノガイ）が加勢したという史実を伝えてきたのである。

サファヴィー朝のタフマースブは、1530 年代後半からカフカース方面に何度も遠征軍を送った<sup>(41)</sup>。カフカース地方で、オスマン帝国とサファヴィー朝との戦いが激しかった地はデルベントである。現在、北カフカース・ロシア連邦ダゲスタン共和国に位置するデルベントは、古来カフカース地方における軍事・交通上の要衝でキプチャク草原と西アジア地方を結ぶ重要な拠点であった。「デルベントという町はあらゆる町の中で大きかった」（KA9:186）、「デルベントという大きな町は最初に作られた町である」（KA10:345）と叙事詩は伝える。クリミア・ノガイ軍は、クズルバシュを攻撃するために、もしくはアディルを救出するためにデルベントへと向かう。「カラサイ＝ミルザとアディル＝スルタンは 4 万の軍勢とともにクリミアからデルベントに行軍した」（KA12:88）、「デルベントという町に戦友たちを率いて向かった」（KA9:253）。デルベントは「鉄の門」という別称があるが、そのことは「カラサイは鉄の門のデルベントに向かって進んだ」（KA13:231）と叙事詩にも表れている。叙事詩はまた、ママイがデルベントについて詳しい情報を残していたと伝える。「ママイが残した多くの文書があった。その中に高価な紙があった。読んでみた。デルベントという町への道、土地、沙漠、湖、井戸が記してあった。その紙を見て、カラサイは興奮して、鉄の門のデルベントを攻めるぞ！（と言った）」（KA14:230）。

カズバンもデルベントと同様によく伝えられる地名である。「カラサイとカジはカズバンという町を手に入れ、6 日間その町に滞在した」（KA10:339）、「カラサイとカジは石の浅瀬から渡った。カズバンという町に彼らは到着した。カズバンを攻め、6 日間そこに滞在して、クズルバシュと戦った」（QQ2:307）。このカズバン、すなわちガズヴィーンは、イラン高原中部にある町で、1548 年にタスマースブによってサファヴィー朝の首都とされた町である（のち 1597 年に都はエスファハーンに遷都された）。「カズバンの近くに来ると、アディル＝スルタンはウイスンの勇士スレイマンとコングラトのウズン＝アイダルという戦士たちに、クズルバシュ軍の偵察に行かぬよう命じたが、彼らは『われらがクス

ルバシュに寝返ることはない」と誓います』と命令を拒んだ。(偵察に行った) 彼らは戦死した」(KA12:88)。このことから、ガスヴィーンが難攻の地であったことがうかがい知れる。なお、デルベントやカズバンのほかにも多くの地名が叙事詩には見られ、これらの地名からも、当時のノガイ＝オルダの領域や周辺地域との関係性を見ることができる。たとえば、キガシュなる地名がしばしば登場するが、これはアストラハン州とカザフスタンとを流れるキガチュ川などと同定できる。カスピ海北岸にあるこの地方はノガイ＝オルダの中心的地域である。またバフチェサライ (KT2:94) やアゾフ (KA14:121) など、クリミア＝ハン国の地名がしばしば見られることにも、小ノガイとクリミア＝ハン国との強いつながりが表れている。バフチェサライはクリミア＝ハン国の首都であったことで知られるクリミア半島の町で、現在でもクリミアの観光名所のひとつである古都である。古来要衝であったアゾフには、15 世紀後半は要塞が築かれ、また 17 世紀にはこの地をめぐる、クリミア＝ハン国、オスマン帝国とドン＝コサックとの間で戦いが繰り返された。また「カバルダから袋をもたせよ (NO:82)」と北カフカースのカバルダという地名も見られるが、この二つの地名、アゾフとカバルダとの間の地は、デヴレト＝ギレイがカジに与えた、まさに小ノガイの本拠地でもある。このほかにもオスマン帝国の首都イスタンブール (KA14:212) やモスクワ公国の都モスクワ (KA14:223) など、小ノガイをとりまく当時の国際情勢を示す地名が叙事詩には見られる。

ところで、クリミア＝ハン国とクズルバシュとの戦いの理由は、先に見たイスマイルがアディルをそそのかしたためであるとする伝承がある。「当時、ノガイの王 patsha の 30 人の息子の指導者はイスマイルという勇士であった。彼は、トルコの王にアディルを陥れる手紙を書いた。『アディルというクリミアの王が強力ならば、カルガサのクズルバシュという敵を従わせるのです。私は非力ですから』という手紙であった。これこそ、アディルに 4 万の軍勢とともに敵クズルバシュを攻撃させた理由なのである」(QQ2:268)。オラク暗殺に代表されるイスマイルの謀略は、伝承において彼の性格を特徴づけるものであるが、クリミア＝ハン国とサファヴィー朝との戦いの理由が、史実とは異なるイスマイルの策略にあったとするこれらの伝承<sup>(43)</sup>からも、イスマイルが徹底的な「悪役」として扱われてきたことがわかる。

### (3) アディルの人物像

アディル＝ギレイは、クリミア＝ハン国のデヴレト＝ギレイ (在位 1551-77) の息子で、次のハン候補者が就くカルガイ職の有力者であった。伝承によると、アディルはカラサイやカジよりも年少であったという。たとえば、アディル 7 歳のとき、カラサイは 16 歳、カジは 14 歳であった (KA4:106)。「アディルがハンになったころ、ノガイの統治者はイスマイルであった」(QQ2:268) というのも、アディルとイスマイルの時代が重なっていることを示している。「アディルは 11 歳でハンになった」(KA5:147) (QQ2:268) と伝えられることがあるが、これは幼少からの勇士の非凡さを示すという口承文芸の伝統は示すものの、



史実を表してはいない。「ハン」はクリミア＝ハン国の統治者の称号であるが、アディルがハンに即位した事実はなく、叙事詩では、アディルがクリミア＝ハン国の若いスルタンであったとされることが多い。スルタンとは、中央アジアや西アジアのイスラーム系政権における官位・尊称のことである<sup>(44)</sup>。

多くの口頭伝承で、主人公の勇者が幼い時には非凡な少年であったことが強調されるが、アディルもまたその例外ではない。「我がアディルは若きスルタン、11歳になった時、試金石を小石のようにして遊び、象牙のように輝いた。12歳になった時、若き鳥のように突き進んだ。14歳になった時、玉座のハンたちの言葉を知って（それを）語った。15歳になった時、馬を選んで乗りこなし、腰には極上の刀を差した。16歳になった時、優れたハンたちが戦った。17歳になった時、70の哨兵を追い払った。18歳になった時、80の哨兵を従わせた。19歳になった時、クリミアを豊かに満たした。20歳になった時、オスマン帝国の偉大なトルコの王から馬の列がやってきて、勅令が届いた」（N01）。

このようにノガイでは、アディルは体力的にも知力的にも秀でた人物であったと誇られるが、アディルの姿は、伝承される地域・民族で若干異なり、必ずしも同一でない点が興味深い。たとえば、アディルとゆかりの深いクリミア＝タタールでは、「アディル＝スルタンはとても美しい人であった」（KT1:221）と肯定的に美化されているのにたいし、アディルとの関係が相対的に薄いカザフでは、捕らわれの身にあったアディルは泣きながら、カラサイとカジに救援を求めるなど、およそヒーローらしからぬ姿を晒す（KA9:237; KA10:343,394）。共通する伝承の中の異なる人物像からは、登場人物をどのように評価しているか、誰を自分たちの英雄ととらえているかがわかるのである。

ノガイの英雄叙事詩『アディル＝スルタン』は、アディルはクズルバシュに捕らえられ、殺害されたと伝える。ルーマニア、ドブルジャ地方出身のクリミア＝タタール人ウリュキュサルによると、オスマン皇帝によって、サファヴィー朝との国境に送られたアディル＝ギレイは、アフムド＝アバドという場所でサファヴィー朝のハムザ＝ミルザの軍隊に捕らわれた<sup>(45)</sup>。虜となったアディルはしばらくして逃亡しようとしたという口実で殺害されたと<sup>(46)</sup>いう。カラサイやカジによって救出されたと伝えるヴァリアントがあるものの、捕らわれたアディルは、実際は敵地で死去したようである。

ちなみに、トルコ近代文学の礎を築いた、詩人にして啓蒙思想家のナムク＝ケマル（1840-88）は、小説『ジェズミ Cezmi』で、アディル＝ギレイを描いている。『ジェズミ』では、アディル＝ギレイとイランのシャー、ムハンマド＝ホダーバンデ（在位 1577-88）の妹ペリハンの仲を嫉妬した、シャーの妃シェフリヤルの陰謀が描かれるが、これはアディルを主人公とした口承叙事詩から翻案したものである。作品の題名にもなっているジェズミの人物像は、カラサイをモデルとしたものであろう。アディルやカラサイの姿がトルコ文学にも現れることは、この伝承の広がりやの大きさを改めて感じさせる。

#### (4) オスマン帝国と「カルマク」とロシア帝国

ノガイ＝オルダ、とくに小ノガイを取り巻く国際環境として、オスマン帝国の存在は大きい。オスマン帝国は、1475 年以降クリミア＝ハン国を保護下に置いていた。クリミア＝ハン国のアディルがオスマンの勅令に従ったことは、先のあらすじで見たとおりである。オスマン帝国の使者がクリミア＝ハン国へ勅書をもたらす場面からは、両国が宗主国・従属国の関係にあったことが読み取れる。オスマン帝国を宗主国としたクリミア＝ハン国に従っていた小ノガイのカラサイとカジは、クリミア＝ハン国のセラスケルであったと伝えられる (KT1:216)。セラスケルとは、オスマン帝国では軍の司令官を指したが、クリミア＝ハン国ではクリミア＝ハンに任命された統治者のことを意味する。叙事詩には、カラサイとカジがセラスケルとしてクリミア政権に信頼され、重用されていたことがはっきりと歌われている。そして、「カジはクリムの 40 人の勇士を 4 万の軍勢とともに集め、アディルのもとにもたらした」(KA10:275) と、彼らがクリミア側に大きな貢献していたことも伝えられる。ここにオスマン帝国とクリミア＝ハン国、小ノガイという一つのラインが浮かび上がる。

叙事詩は「アディル＝スルタンは 10 歳になった。イスタンブルのスルタンが彼に勅令を送った。『余は、アジェム (イラン) のシャーの征服を貴公に求める』とのことであった」(KT:215)、あるいは、「オスマン帝国の皇帝から使いの者がやってきて、彼に勅令を届けた。クズルバシュへの攻撃の準備をするように進言した」(NO1) と伝える。後者のコンケル Kongker はオスマン帝国を意味する言葉で、この他にもフンカル<sup>(47)</sup>やコンドゥケルなどと表される。クリミア＝ハンの息子であったアディルにオスマン帝国側から出征の勅令が出たことは史実であり、その力関係が伝承からも明確にわかる。また、「ムスリムのコンドゥケル＝ハンにカルマクのクズバンというハンから宣戦布告・降伏勧告が来た」(KA3:41) というように、コンドゥケルがイスラーム国家であることも、オスマン帝国であることをすぐさま想起させる。

その一方で、「コンドゥケルというカルマクのハンから勅書が来た。カラサイとカジが恐れなければ、アディル＝ハンというノガイのハンのもとに行かせ、攻撃させよと命じられた」(KA1:150) とコンドゥケルを「カルマク」とするヴァリエントも存在する。史実では、アディルたちに攻撃を命じたのは、カルマクではなくオスマン帝国であり、この点はもちろん正しくない。しかし、「カルマク」という言葉が、(1) 16 世紀から 18 世紀にかけて、中央アジアを席卷したモンゴル系オイラト、(2) 一般的な敵、もしくは異国を示す用語の二つの意味をもつこと<sup>(48)</sup>を考慮すると、ここでは (2) の、異国の意味であるとみなすべきであろう。

また、敵クズルバシュをカルマクとして伝えるヴァリエントも少なくない。筆者が入手し得た、カラサイとカジにまつわる叙事詩の 22 のテキストのうち、クズルバシュ (イラン・アジェム) を敵とするものは 15 であるのにたいし、カルマクを敵とするものは 9 つある (テキストにはクズルバシュとカルマク双方が重複して現れるものもある)。このことは上記

に述べたように「敵・異国」を意味する言葉として「カルマク」が使われるようになったためであると考えられるが、その理由は、ノガイの人々が実際にカルマクと戦った歴史があることが大きいだろう。大ノガイはヴォルガ川左岸に広がっていたが、1613年に東方から侵攻してきたカルマクの脅威のため、ヴォルガ・ドン川間に逃走した。1616年に以前の牧草地に帰還することができたものの、再び1634年カルマクの攻撃を受けて、ヴォルガ右岸へ移動していった。<sup>(49)</sup> 筆者はかつて、英雄叙事詩『チョラ＝バトゥル』を例に、歴史的事件を扱った叙事詩は、人々がその出来事をどのように受け止め、それにたいしてどのような歴史認識をもってきたかによって変容しうることを指摘した。<sup>(50)</sup> 主人公チョラとロシアとの戦いを描いたこの物語はカザン＝タタールで生まれたものと考えられるが、やがてカザンに伝播すると、主人公の敵はロシアではなくカルマクとして描かれる。ロシアからカルマクへという敵の変化は、ロシアのカザン征服という事件をどのように伝えてきたかという歴史認識を示す。叙事詩には、伝播の過程で本来伝えられていた内容が自分たちの歴史観に適応する形へと変化するという特徴があるのだ。<sup>(51)</sup> 叙事詩におけるノガイの敵民族がクズルバシュからカルマクに変化した理由は、ノガイの人々のカルマクとの戦いの歴史を反映したためと考えられる。本来オスマン帝国やその皇帝を意味していたコンドゥケルが、敵や異国を意味する「カルマク」のハンとなったのも、このような変容の一種であると考えられるのである。

小ノガイとロシアとの関係も叙事詩には描かれる。小ノガイは、親ロシア派として知られた大ノガイと対抗しており、ロシアとは敵対的な状況にあった。叙事詩は、ロシアと小ノガイとの関係をこう伝える。「ロシアが来て、民の家畜を奪っていった。ロシア人は去ろうとしたとき、アフメトが来て、追いかけていったのだった。追いかけたアフメトを彼らが殺した」(KA14:351)。アフメトなるノガイの戦士が家畜を強奪したロシアを追走するが、殺されてしまう。その後、カラサイとカジは攻めてきた敵ロシアと戦う。「『ロシア人が敵になった。攻めてきた』との知らせが届いた。この知らせを聞いたカラサイは怒って、(略)カジとともに武器を手にし、敵を追った。彼らは休まず3日間進み、敵に追いつき戦った。困難ではあったが、敵に取られた人々や家畜、財産を取り返した」(KA14:355)。ここからは、小ノガイがロシアと敵対関係にあったことがはっきりと理解できる。実際、16世紀末ころ、小ノガイはロシア南部やヴォルガ川流域を襲撃した。<sup>(52)</sup> 以上のように、小ノガイが、オスマン帝国やクリミア＝ハン国と強くつながっていた反面、サファヴィー朝やロシアとは敵対関係にあったことが叙事詩からも確認できるのである。

#### 4. 英雄物語としての特徴

これまで、16世紀後半のノガイ＝オルダ、とりわけ小ノガイについて歴史的文脈で見えてきたが、ここでは視点を变えて、カラサイとカジ、アディルを主人公とした英雄叙事詩の口承文芸としての特徴やそこに見られる超自然的・神話的世界観について見ていこう。

### (1) 文学的・フォークロア的特徴

中央ユーラシア＝テュルクの英雄叙事詩では、主人公の非凡な成長や幼少から優れた能力を発揮する様が描かれることが一般的である。<sup>(53)</sup> アディルが11歳から優れた能力を発揮していたと歌われるのは先に見たとおりである。また、カジはまだ幼かったにもかかわらず、クリミアの40人の勇士の4万の軍勢を集め、アディルにもたらしたと描かれる(KA10:275)。歴史に基づいた叙事詩ではあるが、それらには、口承叙事詩一般に見られる定型化や誇張法といった文芸的特徴も顕著である。

英雄叙事詩では、名馬の存在や妻とのロマンスが欠かすことのできないモチーフである。<sup>(54)</sup> アディルの飼っていた馬をカジが飼いならし、捕らわれたアディルを救出するために旅立つ様子は次のように描かれる。「アディルの宮殿にいる栗毛馬を外に出した。カジはその栗毛馬を見てみた。カジが近づくと栗毛馬は後ずさりした。その馬に乗って、カジは本営の周辺8日の距離を駆け回った。こうして飼いならし、帰宅すると、この馬が気に入ったと言って、3日以内に食料を集めて支度をし、カジは出発した」(KA1:168)。バシユコルトのヴァリエーションでは、「ガゼルソルタン(アディル＝スルタン)が負けて、彼が捕らわれたことを聞いて、老婆は、カラサイをスルタンの駿馬に乗せて、敵に立ち向かわせた」(BA:172-173)と、カジではなく、カラサイがアディルの愛馬に乗って、敵を倒したとされる。またカラカルパクやカザフのヴァリエーションには、稀有な駿馬を手に入れようと、その飼主コクシェに掛け合うが、カラサイの妹と引き換えでなければ与えないと断られる場面がある(QQ)(KA1)。その駿馬は、結局妹がコクシェに嫁ぎ、あるいはコクシェが折れるということで、カラサイのものとなるのだが、他の英雄叙事詩と同様に、馬にまつわるエピソードが欠かせないものとなっている。

勇士のロマンスについてはどうであろうか。テュルクの叙事詩では、勇士が妻を探す旅や敵からの妻の奪還がよく描かれる。妻との結婚は物語のクライマックスの一つなのであるが、カラサイやカジを描いた叙事詩では、勇士のロマンスは総じてそれほど大きな比重を占めない。とはいえ、物語の終盤にアディルを救出したカラサイがアディルの妹を妻に娶ったり、ペルシア皇帝の娘ペリハンや后シェフリヤルがアディルに恋をしたりするなど、多くの英雄叙事詩と共通するロマンス的特徴が随所に見られる。

### (2) 超自然的・神話的要素

カラサイやカジ、アディルなど歴史上の人物や彼らにまつわる出来事を伝える叙事詩からは、中央ユーラシアの信仰や超自然的・神話的要素を見出すこともできる。叙事詩には、「わが望みを神がかなえますように(KA10:323)」、「唯一神アッラーよ、庇護者たれ(KA13:17)」、「アッラーの助けがあれば、国境に敵が来れば、カラサイとカジが無事に行けば(KA10:287)」とアッラーの名が散見され、また「アディルと彼の妹イリヤの命名に際し、イシャーণもムッラーもホジャも命名できなかったため、カジが名付けた」(KA7:58)



のように、イスラームの聖職者や知識人も登場する。中央アジアではイスラーム化が8世紀以降活発化した、イスラームは叙事詩にも色濃く反映されているのである。

唯一神アッラーは、「道中カラサイを我らのテングリが守った」(KA8:139)、「わが面前にクズルバシュを、わがテングリが追い立ててくれれば」(KA10:323)、「わがテングリは、愛しいアディルを高貴なる者のいるクリミアに連れ戻すだろうか？」(KT1:223)のようにテングリの名で表現されることもある。古代テュルクの人々は、テングリ、すなわち天空を神とみなして信仰してきたが、ここでのテングリはテングリ信仰の神ではなく、イスラームのアッラーとみなすべきであろう。イスラーム化が進むと、次第にテングリ崇拜は廃れていくが、テングリという言葉自体はイスラームにおける唯一神アッラーを指す言葉として用いられたからである。

中央ユーラシアの草原地域のイスラーム化については、*ババ*=テュクレスなる人物によるイスラームへの伝説的な改宗説話がよく知られている。14世紀前半のジュチ=ウルス(キプチャク=ハン国)のウズベク=ハンが、イスラーム聖者とそれまで信奉していたシャマンとを宗教論争させたが、勝負がつかぬため、焼けた竈の中に入って生き残った方を信仰することにした。その勝者こそ*ババ*=テュクレスであり、以後、中央ユーラシアの遊牧民はムスリムになったという<sup>(55)</sup>。その伝説的な聖者は叙事詩には*ババ*=トウクティ=シャシュトゥ=アジズの名で登場し、「*ババ*=トウクティ=シャシュトゥ=アジズは、聖者*äulie*で長老*shaiqy*で守護霊*pir*であった」(KA10:257)と特別な存在であったことが強調される。その一方で、「ヌラッディン(エディゲの息子)の先祖」(KA4:108)、「12バウルのノガイに先祖*ババ*=トウクティがいた。エディゲ=スルタンがハンであった」(KA6:369; KA7:9)、「勇士ママイと血のオラク、勇士ムサの息子たちであった。*ババ*=トウクティ=シャシュトゥ=アジズは、彼らの先祖であった」(KA9:149)などと、ノガイ=オルダの正統性がこのイスラームの伝説的な人物と結びつけられる。このことは、エディゲ裔のさまざまな人物を描く「ノガイ大系」のいずれの叙事詩においても強調される点である。なお、『カラサイとカジ』では、*ババ*=テュクレスではなく、アウシュバイなる聖者とスー=ペリ(水のペリ)<sup>(56)</sup>との間にエディゲが生まれたとするヴァリエントもある(KA10:255-257)。このヴァリエントは、名称は異なるが父が聖者であり、また母をペリとしていることや、「天人女房譚」と同一のあらすじであることなど、叙事詩『エディゲ』に描かれる*ババ*=テュクレスの逸話<sup>(57)</sup>と共通している。

さて、カラサイやカジを描く伝承には、この他にもイスラームに関係する、この地域に特有の超自然的存在が見られる。「危険を冒して我らは行こう。ガユプ=エレンと40のシルテンは、アッラーの伴侶になるだろう」(KA3:62)、「七層の地下牢に来たのは、ノガイの娘ではなく、ガユプ=エレン=ピリであった。アッラーの命により、外から準備させたのであった」(KA10:390)、「ガユプ=エレンの7人のピル、7人のピルの中に、白いターバンを巻いた聖者がいた。あなたは私のピルです、助力をください」(KA13:68)、「すすり泣くアディルの声が、ガユプ=エレンの耳に入った。そのため、彼の願いは受け入れら



れ、ピルたちは力を与えた」(KA10:395)、「カラサイ＝バトゥルは恥じ入りながら、ピルたちに助けを求めた」(KA4:134)などと、ガユプ＝エレンや40のシルテン、ピルなる存在が随所に現れる。ガユプ(ガイプ)＝エレンやシルテン(チルトン)とは、人々を困難から庇護し、幸運をもたらす、超自然的な力をもつ魂である。イスラーム修行僧と深い関係があり、叙事詩でもアッラーの伴侶とされたり、アッラーに命じられたりしている。またピルは聖者や庇護者を意味し、これに助力を求めたり、その特殊な力でアディルを探し出したりする様子も叙事詩にはよく描かれる。ピルはさまざまな姿で現れるが、もっとも多く見られるのは、鳥の姿である。「若いアディルは佇み泣いた。(翼が銀で首が金の)黒い鳥は彼のピルであった。それが(クリミアに)飛んできたので、ピルから助けを得られた」(KA9:237-238)とアディルを救うピルはカラクシュ(黒い鳥)の姿を取っている。鳥のほかにも、負傷したカラサイの傷をウサギが治療するのだが、その正体は、彼自身のピルであった(KA7:96)とウサギの姿も取る。このように、非凡な能力の勇士は、自らの力に加え、超自然的な存在の聖者の援助を受けて、任務を遂行する。勇者たちを庇護する守護精霊は欠かせない存在である。

中央ユーラシアのテュルク系遊牧民は戦などで苦境に陥ると、アルワクといわれる先祖の霊にも助けを求めた。祖先崇拝の具体的な表れである。叙事詩にも、彼らが祖先を崇拝していたことが明確に示される。「カラサイがアディルを探して、見つけ出せずにいると、彼の父がピルとなって飛んできて、アディルのいる場所を指し示した」(KA9:251)と死んだはずの父の魂がピルになって現れる。さらに、「塹壕に叫びながら突進した。『エディゲ』とウランを叫んだ」(KA7:87)、「カラサイとカジ、二人の孤児は『エディゲ!』と叫んで前進を続けた」、「縛られていたアディル＝ハンは『エディゲ』というウランを耳にした」(KA14:312-313)とノガイ＝オルダの創始者たるエディゲの名を叫びながら、彼の霊力に励まされる。ウランとは、先祖の霊を呼ぶための叫び声で、戦のときの闘いの声をはじめ、さまざまな困難な場面で叫ばれた。また、エディゲの名とともに、父オラクのウランも叫ばれる。カラサイはカジに言う。「二つの地からわれら二人で『オラク!』とウランを叫び合おう。『オラク』と叫ぶ我らの声がカラタウの地に広がるように」(KA10:347)、「俺が『オラク』というウランを叫べば、たくさんのクズルバシュが死ぬだろう」(KA13:44)、「カラサイはオラク＝バトゥルの子供だ。彼をハンに推戴しよう。オラク＝バトゥルのアルワクに出会うのだ」(KA3:62)。このように、先祖の霊魂が崇拝されていたことや、その力が求められたことが叙事詩からもよく理解できるのである。

夢が重要な役割を果たすのは、テュルクの多くの叙事詩と同様である。とくにアディルの母が見た夢を解釈することで、アディルが命を落としていたことを理解する場面は、夢の重要な働きを示す。3章で見たように、占い師 balshy は母にアディルが無事でいると安心させるが、母が帰宅すると正しい解釈をする。夢解釈を行う占い師はシャマンであろう。シャマンは異界に赴き、テングリから託宣を受けたり、予言を行ったりすると信じられていた。アディルの安否を解く占い師は、まさにシャマンの姿そのものである。イスラ

ーム化が進んだ中央ユーラシアにおいても、シャマニズム的要素はいたるところに残ったが、それは叙事詩にも強く反映されているのである。この他にも「アディルは死に、希望は断たれたらしいが、私の見た夢では死んではないようだ」(KA3:68) など、遠い地にいるアディルの安否を夢で占うという場面が多く、物語を盛り上げるエピソードとなっている。なお、ルーマニア、ダブルジャータタールのヴァリエーションでは、カラサイがデルヴィシュ（イスラーム修行僧）になって、夢解釈をしてやる場面もある<sup>(59)</sup>。アディルの母が息子の死を暗示する夢を解釈するエピソードは、ママイの安否を夢で解釈する場面と類似する<sup>(60)</sup>。夢解釈は、テュルクの叙事詩に不可欠な要素である。

### (3) 『カラサイとカジ』・『アディル＝スルタン』の地域的特徴

筆者はかつて、物語の結末や主人公の運命がどう描かれているかに注目し、叙事詩のヴァリエーションを分類し、そこに地域的特徴が存在することを指摘した<sup>(61)</sup>。先にも触れた『チョラ＝バトゥル』のヴァリエーションは、主人公が戦う敵や主人公が戦死するか、凱旋帰国するかで大きく二つに分けられる。それでは、アディルを描く叙事詩には、どのような地域的特徴が見られるだろうか。

ノガイ版やクリミアータタール版がアディルを主人公として描いているのにたいし、カザフ版やカラカルパク版はカラサイとカジを主人公とし、アディルは必ずしも主人公ではない。そして、ノガイ版とクリミアータタール版、ダブルジャータタール版には、カジらがアディルを救出することなく、アディルが獄死するという、より史実に忠実であると思われる結末があるのにたいして、カザフ版やカラカルパク版などにはカジらがアディルを救出し、大団円で終わるというヴァリエーションが多い。自らの歴史がクリミア＝ハン国の歴史と大きく重なるノガイやクリミアータタールの人々は、クリミア＝ハンの王子であったアディルを中心に伝え、相対的にクリミア＝ハン国と離れたカザフやバシュコルトなどではノガイ＝オルダの勇士を中心に伝えてきたのであろう。カザン＝タタールやクリミアータタールが『チョラ＝バトゥル』でロシアによるカザン征服を悲劇的に伝えてきたように、1783年のロシアのクリミア併合以後、ノガイの地から離散した人々が悲劇性・歴史性を重視する伝承を語り継いできたものと思われる。

こうした歴史観の相違は、先にも見たように、敵がノガイ版、クリミアータタール版、ダブルジャータタール版においては、史実どおりにクズルバシュである一方、カザフ版やバシュコルト版ではカルマクとされていることにも現れている。このように、同一の出来事や人物を描く叙事詩も、地域・民族によって、異なる特徴が明確に現れることが改めて確認されよう。

おわりに

本稿では、16世紀後半のノガイ＝オルダ、とりわけ小ノガイと呼ばれる集団の有力者

や彼らを取り巻く国際環境について取り上げた。ノガイ＝オルダは、大ノガイと小ノガイに分裂・対立し、その結果、大ノガイは、ロシアの勢力拡張の中、ロシアとの関係を維持することに活路を見出した。改宗したイスマイルの子孫がロシアの名家ウルソフ家として引き立てられたことはよく知られたことである。一方、小ノガイはクリミア＝ハン国の庇護の下、自立した政権を維持させようとした。オスマン帝国とサファヴィー朝との対立という当時の国際情勢を背景に、オスマン帝国側に立つクリミア＝ハン国とともに小ノガイがサファヴィー朝と戦ったことから、苦境に置かれた小ノガイの選択がうかがえる。そうした小ノガイの記憶は、やがてその住民の子孫であるクリミア＝タタールやノガイ、カザフなどによって長く語り継がれる。

彼らが語り継いできた叙事詩は共通する記憶を伝えるものの、地域によって異なる特徴を有することも、本稿では改めて明らかになった。クリミア＝ハン国と強い結びつきがあったクリミア＝タタールやノガイでは、アディルを主人公とした叙事詩が伝えられ、捕らわれのアディルが殺されると描かれ、敵がクズルバシュと史実に忠実に伝えられている。それにたいし、カザフやバシュコルト、カラカルパクでは、カラサイやカジというノガイの勇士を主人公とし、彼らの活躍によって捕らわれたアディルが救出されるとするものが多い。また敵もクズルバシュではなく、カルマクとするヴァリエーションも一部ある。こうした相違は、とくに歴史的な出来事を描いた叙事詩では、『チョラ＝バトゥル』を筆頭によく見られる特徴である。

ノガイ＝オルダは、大ノガイ・小ノガイなどに分裂し、その後ノガイの人々は、現在のカザフやカラカルパク、バシュコルト、ノガイやクリミア＝タタールなどの民族形成に深くかかわる一方で、次第に歴史の表舞台からその姿を消した。現在では、その名は北カフカースのノガイ人に残るに過ぎないが、その周辺の諸民族は叙事詩をはじめとする伝承に古の記憶を込めて、伝えてきたのである。それらの叙事詩にはイスラーム的、あるいはシャマニズム的な要素が散りばめられていることも改めて確認できた。英雄叙事詩は、彼らの歴史のみならず、精神文化も知ることのできる情報の宝庫であるのだ。

中央ユーラシアの歴史においてノガイ＝オルダの果たした役割は大きい。ほとんど注目されることのないノガイ＝オルダの役割は、もっと評価されるべきではないだろうか。また、その歴史を語り伝えてきた英雄叙事詩から学び取ることもまだまだ多いはずである。

#### ——参考・引用文献

##### カザフ版

- KA1 Qarasai, Qazi (*Batyrlyar jyr* 5, Almaty, 1989.150-175)
- KA2 Qarasai, Qazi (Khalel Dosmukhameduly, *Alaman*, Almaty, 1991.127-141.; Qazaqtyng batyrlyq eposy; *Babalar sozi* 41, 11-40)
- KA3 Qarasai, Qazi (*Babalar sozi* 41: Qazaqtyng batyrlyq eposy, 41-82)
- KA4 Qarasai, Qazi (*Babalar sozi* 41: Qazaqtyng batyrlyq eposy, 139-256)
- KA5 Qarasai, Qazi (*Babalar sozi* 41: Qazaqtyng batyrlyq eposy, 83-138)

- KA6 Qarasai, Qazi (*Babalar sozi 41: Qazaqtyng batyrlyq eposy*, 369-396)
- KA7 Qarasai-Qazi (*Babalar sozi 42: Qazaqtyng batyrlyq eposy*, 9-115)
- KA8 Qarasai-Qazi (*Babalar sozi 42: Qazaqtyng batyrlyq eposy*, 116-148)
- KA9 Qarasai-Qazi (*Babalar sozi 42: Qazaqtyng batyrlyq eposy*, 149-254)
- KA10 Qarasai-Qazi (*Babalar sozi 42: Qazaqtyng batyrlyq eposy*, 255-406)
- KA11 Ädil Sultan (Isin A.I., «Ädil sultan» *epikalyq jyry*, Almaty, 2001, 20-46.)
- KA12 Adil Sultan (İnan A., Orta türk destanları ve kırım, *Makaleler ve incelemeler*, Ankara, 1968, s.87-91.)
- KA13 Qarasai-Qazi (*Babalar sozi 46: Qazaqtyng batyrlyq eposy*, 9-120)
- KA14 Qarasai-Qazi (*Babalar sozi 46: Qazaqtyng batyrlyq eposy*, 121-355)

#### カラカルパク版

- QQ1 Qarasai-Qazy (Qazaqtyng batyrlyq eposy; *Babalar sozi 40*, 313-424; Qazaqtyng batyrlyq eposy 1992, 53-97)
- QQ2 Qarasai, Qazi (*Babalar sozi 41*, 256-368; Qazaqtyng batyrlyq eposy 53-97)

#### ノガイ版

- NO1 A'dil-soltan Ämze Mutälipuly Әмзе Мүтәліпұлы (Adil-soltan, 81-87.; Adil-soltan, 414-418.)
- NO2 Adil'-soltan' Krymskii (Anan'ev, Qaranogaiskaia narodnaia istoricheskaiia predaniia, 1900, 27-29.)
- NO3 Adil sultan (İnan A., Orta türk destanları ve kırım, *Makaleler ve incelemeler*, Ankara, 1968, s.93-96) (ノガイ＝クリミア版)

#### バシュコルト版

- BA1 Qarasai menän Qazy batyr (*Bashqort xalyq ijady 2*, Öfö, 1997, 1997. 172-173)

#### クリミア (ノガイ) 版

- KT1 Adil Sultan (Kögäni kijat Nogai; Radlov 7, 1896, 215-223)

#### ダブルジャ版

- DT1 Adil sultan (Kaya, Doğan, Adil sultan destanı.)

#### ——注

- (1) 拙稿「16 世紀のノガイ・オルダ (1)」『和光大学表現学部紀要 12 号』。
- (2) カズ Qazy とするテキストもあるが、本稿ではカジに統一する。
- (3) 混乱しやすいが、このノガイは現在北カフカースに居住する民族名であり、ノガイ＝オルダ住民の子孫であると考えられる。歴史上のノガイと同一ではないので、注意が必要である。
- (4) 拙稿「16 世紀のノガイ・オルダ (1)」70 頁。
- (5) ママイがイスマイルに殺害されたと伝えるヴァリエントもある。同上 74 頁。
- (6) Trepavlov V.V., *Tiurkskie narody srednevekovoi Evrazii*, Kazan', 2011, S.40.
- (7) クリミア＝ハン国は、1475 年からオスマン帝国の保護下にあった。
- (8) カザフ (KA11) やノガイ (NO1-3)、ダブルジャ＝タタール (DT) など一部のヴァリエントではカジは登場しない。
- (9) エディゲについては、拙稿「ノガイ・オルダの創始者エディゲの生涯」『和光大学表現学部紀要』8 号を参照。

- (10) 拙稿「16世紀のノガイ・オルダ (1)」68頁。
- (11) 同上71頁。
- (12) ノガイ＝オルダの統治者の称号。
- (13) イスマイルによるユスフ暗殺については、拙稿「16世紀のノガイ・オルダ」70頁を参照のこと。
- (14) Jirmunskii, *Tiurkskii geroicheski epos*, Leningrad, 1974, S.482.
- (15) イスマイルの他の別名はアルシュ・スマイル、あるいはアルチュスマイルで、くるぶしの骨のアルシュ（くぼみのある＝幸せな面、アリチカ）という言葉に由来しているとの説もある。Jirmunskii, 403.
- (16) PSRL (Polnoe Sobranie Russkikh Letopisei) 13, S.245.
- (17) PSRL13, S.256.
- (18) クリミア＝ハン位にはチンギス＝ハンの子ジュチの子孫が代々継いだが、ハン国内では、シリン家やバリン家など有力貴族が大きな力をもっていた。
- (19) Alpargu, Mehmet, *Nogaylar*, İstanbul, 2007, s.60.
- (20) PKRN (*Posol'skie Knigi po cviaziam Rossii c Nogaiskoi ordoi*) 5 (1551-1561gg.).l.187ob.l.188. ,Kazan', 2006, S.323.
- (21) カジを首領とする一派が、ノガイ＝オルダを離れ、カフカース北西部に小ノガイを興したのは1560-70年代のことであったとの説もある。PKRN. 343.
- (22) Alieva, Sevindj, *Nogaiskie Tiurki*, Baku, 2010, 46.
- (23) Kırızoğlu, Fehrettin, *Osmanlıkar'ın Kafkas-Ellerini fethi (1451-1590)*, Ankara, 1976, s.383.
- (24) Novocel'skii, A.A., *Bor'ba Moskovskogo gosudarstva c Tatarami v pervoi polovine 17 veka*, Moskva, 1948, S.16.; *Istoriia Kazakhstana v russkikh istochnikakh 16-20 vekov 1*, Almaty, 2005, S.140.
- (25) 拙稿「16世紀のノガイ・オルダ (1)」69頁。
- (26) Alpargu, Mehmet, *Nogaylar*, İstanbul, 2007, s.66.; Trepavlov, *Istoriia Nogaiskoi Ordy*, Moskva, 2001, S.314.
- (27) 同上。
- (28) このほか、ウルスの孫ウラクはロシアの動乱時代の偽ドミトリー2世を1610年に殺害した人物として知られている。
- (29) Petr Dolgorukov, *Rossiiskaia Rodoslovnaia Kniga 2*, Sanktpeterburg, 1855, S.32. なお、モスクワのボリショイ劇場は、1766年に県検察官ピョートル＝ウルソフ公邸に作られた劇場に由来する。
- (30) オルマンベトについては拙稿「オルマンベトとその時代」『東北アジア研究センター叢書』13号を参照。
- (31) PKRN. (1576g.) (366.ob.). Moskva, 2003, S.34, 77; Trepavlov, S.364.
- (32) PKRN.l.366.ob. S.34.
- (33) Novocel'skii, S.16.; Kidirniiazov, S.169.; Alpargu, s.85.
- (34) Trepavlov, S.364. ユスフ一族はのちに正教に改宗し、ロシア貴族の名家ユスボフ家となる。
- (35) Kurat, Akdes Nimet, *4-18 yüzyıllarda Karadeniz kuzeyindeki Türk kavimleri ve devletleri*, Ankara, 2002, s.243.
- (36) Ialbilgamov, A.A., *Ocherki voennoi istorii nogaitsev*, Makhachkala, 2004, S.20.
- (37) Trepavlov V.V., *Tiurkskie narody srednevekovoi Evrazii*, Kazan', 2011, S.56.
- (38) 叙事詩にはクズルバシュを「イラン」と現代的に表現する例もある。「主のいない、われらのオルダ。庭園のようなイランを見れば、孤独なアディルが見つかりますように」。(KA13:88)
- (39) 永田雄三・羽田正『成熟のイスラーム社会 世界の歴史15』中公文庫、347頁。
- (40) Novocel'skii, S.31.
- (41) 永田雄三編『西アジア史2』山川出版社、206頁。
- (42) KA7:13, KA9:151, KA10:268 など。
- (43) このほかに、KA9:268, KA12:87 など。
- (44) スルタンは、オスマン帝国では「君主」を、カザフ＝ハン国では「ハンの子息」を意味した。



- (45) 1578年11月30日という説がある。
- (46) Ülküsal, Müstecib, *Kırım Türk-Tatarları*, İstanbul, 1980, s.53.
- (47) フンカル国はオスマン帝国を意味する言葉で、フンカル=ハンはオスマン帝国皇帝を指す言葉である。
- (48) 拙稿「英雄叙事詩の伝える記憶」塩川伸明他編『ユーラシア世界3 - 記憶とユートピア』東京大学出版会、176頁。
- (49) Chelebi, Evliia, *Kniga puteshestviia* 2, Moskva, 1979, S.221.
- (50) 拙稿「テュルク英雄叙事詩の地域的特徴-『チョラ=バトゥル』の分類をもとに」『地域研究論集』3巻2号、国立民族学博物館。
- (51) 拙稿「英雄叙事詩の伝える記憶」、172頁。
- (52) Alpargu, s.86.
- (53) 拙書『中央アジアの英雄叙事詩』東洋書店ブックレット、13頁。
- (54) 同上。
- (55) Utemish-hadji, *Chingiz-name*, Alma-Ata, 1992, S.132-134. ウテミシュ・ハージー著、川口琢司・長峰博之訳注編『チンギス・ナーマ』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2008年、31-33頁。
- (56) ペリは、女性の特性をもつことが多い、超自然的な存在。
- (57) 拙稿「ノガイ・オルダの創始者エディゲの生涯」、32頁。
- (58) KA9:242, KA10:378, KA13:69 など。
- (59) Kaya, Doğan, *Adil sultan destanı*, s.5.
- (60) 拙稿「16世紀のノガイ・オルダ(1)」75頁。
- (61) 拙稿「テュルク英雄叙事詩の地域的特徴-『チョラ=バトゥル』の分類をもとに」。
- (62) 今回扱ったテキスト一覧からもわかるように、たとえばカザフには多くのノガイ=オルダにまつわる伝承が記録されている。